論文要約

グロリアーナの祝祭—エリザベス一世の文学的表象

竹村はるみ

本論文は、エリザベス朝文学におけるエリザベス一世像の変遷を分析すると共に、王権・文学・祝祭の三点を基軸として構築されたエリザベス朝特有の文化システムを歴史的に跡づけることを目的とする。エリザベス一世は、半世紀近くにわたって 16 世紀後半のイングランドを統治し、後の大英帝国の繁栄へと繋がる礎を築いた君主として、現代もなお圧倒的な人気と知名度を誇る。その政治的手腕もさることながら、生涯独身を貫いたことから「処女王」として人々の崇敬を集めたエリザベスのカリスマ性は、ウィリアム・シェイクスピアやエドマンド・スペンサーをはじめとする同時代の文人達の詩的想像力を大いに鼓舞したことでも知られる。エリザベスを賛美するべく量産された文学作品がイギリスのルネサンス期に相当するエリザベス朝の文学的繁栄を促進したと言っても過言ではない。しかし、いわゆる「エリザベス崇拝」と呼ばれる文化現象は決して単純な君主崇拝に終始したわけではなく、そこから立ち現れるエリザベス一世像は実に多くの矛盾を孕んでいる。

本論文では、文学がいまだ本来の祝祭性を留めていた時代としてエリザベス朝を位置づけた上で、エリザベス一世に関連した近代初期英文学作品と、ロンドン及び地方で展開した祝祭文化を年代順に取り上げながら、エリザベス表象の変遷を文化史的に考察した。具体的には、女王の戴冠を祝してロンドンの街路で催された余興の数々（第一章）、女王の結婚問題やイングランドの外交問題をめぐって議論が紛糾した 1560 年代から 1570 年代半ばにかけての祝祭余興や宮廷文学（第二章、第三章）、エリザベスの結婚の可能性が事実上消滅し、処女性の定義が大きく変化した 1579 年の文学作品（第四章）、1580 年代以降開花したエリザベス朝騎士道文学（第五章）、同じく 1580 年代以降本格化したロンドンの劇場文化におけるエリザベス表象（第六章）、女王の高齢化に伴い、その政治的求心力が急速に翳りを見せた 1590 年代の風刺詩・風刺喜劇（第七章）を多角的に検証した。以下、各章の内容を略述する。

まず、序章「「エリザベス崇拝」という神話」では、エリザベス一世の表象をめぐる先行研究を概観しつつ、本論文の目的と研究手法を提示した。エリザベス一世の表象の多義性を考察する際に本論文が特に注目したのは、エリザベス朝イングランドの豊かな祝祭文化である。宗教改革後の近代初期イングランドでは、聖人崇拝を典型とする従来の宗教祝祭や儀式に代わって世俗的かつ娯楽的な祝祭文化が興隆した。中でも、圧倒的な規模を誇ったのは華麗な宮廷祝祭だが、注目に価するのはその公開性である。エリザベス一世の戴冠式の行進に始まり、ガーター騎士団の叙勲式典、毎年盛大に催された即位記念日の馬上槍試合、女王の地方巡幸に伴って各地で催された歓迎式典といった宮廷祝祭・余興の数々は、一般公開されることによって、君主のイメージ構築に貢献すると共に、エリザベス朝イングランドの多種多様な文学ジャンルの創出に多大な影響を

及ぼした。従来より祝祭研究は王権表象の分析において欠くべからざる領域だったが、祝祭と文学の双方向的な影響関係を実証主義的に再考察した点に本研究の学術的意義がある。

第一章「女王であることの困難」では、1559 年のエリザベス一世の戴冠式の行進の際にロンドンの街路で催されたパジェント、行進の模様をいち早く報道したパンフレット『戴冠式の前日におけるロンドン市からウェストミンスターへと至る女王陛下の行進』を取り上げ、女王批判論を巧みにかわし、時にはそれを逆手に取る形で、理想の君主像が構築されていく様子を考察した。そもそも、比喩的な語りや描写を通して道徳的概念を表現する寓意は、ルネサンス期のヨーロッパ人にとっては聖書を通しておなじみの表現様式である。文学の存在意義を「教え、楽しませる」ことに見出すのは、ホラティウスに始まる文学擁護論の王道であるが、わかりにくいことをわかりやすく、伝えにくいことをそれとなく巧く伝えるのは寓意の本領である。言葉を介さずに視覚に訴えることができる寓意を活用した戴冠式の行進のパジェントは、識字率が低い時代に、民衆に対する抜群の訴求力を発揮したものと推測される。

ルネサンス期のヨーロッパにおける宮廷祝祭で寓意が果たした役割は、フランセス・A・イエイツやロイ・ストロングの研究をはじめとしてこれまで盛んに論じられてきた。本論文が特に注目したのは、王権のイメージ形成に寓意が用いられる場合、それが諸刃の刃となりうる点である。近代初期のヨーロッパにおいて、王権のイメージ戦略を王室が管理することはもはや不可能となり、君主の自己成型が限界に達したことは、既に従来の批評で指摘されている通りである。新歴史主義批評が詳らかにしたように、王権がスペクタクルとして機能し、その虚構性や演劇性が極度に前景化される時、王はあくまでも主題の一つとなり、多義性は寓意による王権表象の宿命となる。それは一体何を意味するのか、とたえず思考しながら鑑賞し、見かけの裏に隠された意味を探ることを促す寓意は、多層的な意味構造を前提とする。その結果、表面上は君主崇拝を目的とする祝祭であっても、作者や主催者がそこに自らの政治的主張をひそかに織り込むことが可能となる。

その好例の一つとして第二章「求愛の政治学」で着目したのは、法学院という閉鎖的な共同体の中で営まれた祝祭文化である。本章では、法学院祝祭の分析を通して、エリザベス一世がいわゆる結婚適齢期を迎えていた1560年代における女王の表象を考察した。法学院祝祭の出し物は、宮廷祝祭の影響を色濃く受ける一方で、王位継承や外交政策といった政治問題をあえて取り上げ、時に王室や政府に対する批判的な見解を提示する風刺的な傾向を有していた。1561 年から翌年にかけて開催されたインナーテンプル法学院のクリスマス祝祭もまた、この系譜に位置づけられる。従来の研究では、女王の寵臣ロバート・ダドリー(後のレスター伯) を招待して華々しく開催されたこのクリスマス祝祭は、ダドリーによるエリザベス一世への求婚の文脈で解釈される傾向がある。本章では、この定説には疑義がある点を指摘した上で、唯一の情報源であるジェラルド・リーの『紋章の基礎』を法学院の祝祭文化の観点から考察することにより、余興の寓意に関する再解釈を試みた。未婚の女王の身体をめぐる騎士道ロマンス的な余興は、男性中心主義的な法学

院の文脈に置かれると、男性貴族と法学院生の間でとりかわされる極めてホモソーシャルな絆を演出する文化装置となる。女王の存在ははるか遠景へと退き、かわって前景化されるのは、騎士道的エートス、そしてそれによって自己成型を図るレスター伯、法学院それぞれの思惑である。

レスター伯の周囲に形成された文学的コミュニティは、第三章「女王陛下のやんごとなき娯楽」でさらなる考察の対象となっている。本章では、1570 年代のエリザベス一世の地方都市への巡幸に焦点を当て、これまであまり研究が進んでいない巡幸録の調査を通して、巡幸に伴う祝祭余興の執筆・出版に携わった軍人詩人の協働体制を明らかにすると共に、これら巡幸録出版の背景には女王の穏健的な宥和政策に対する兵士の不満があったこと、それを取り込むことでネーデルラントへの軍事支援へと繋げるプロパガンダを行ったレスター一派の企図が作用していた可能性が強いこと、の二点を指摘した。本章が特に重点を置いたのは、レスター伯の活動は決して上から下へのパトロン活動ではなく、市民と貴族の互恵的な関係に拠るところが大きい点である。例えば、トマス・チャーチヤードが出版したノリッジ巡幸録（『チャーチヤードの雑録の第一部』所収）は、祝祭のテクスト化という新しい流れを生み出す契機となり、女王や宮廷貴族のみならず一般読者を観客とする仮想の祝祭空間を出版市場に胚胎した点において、エリザベス朝の祝祭文化の新たな方向性を示している。

第四章「牧歌の女王—最後の結婚交渉とレスター・サークルの反撃」では、エリザベス一世とフランス王太子アンジュー公の結婚交渉をめぐって政治的分裂が深刻化した 1579 年に焦点を当て、さらに激化するレスター一派の文芸活動の出版文化史的意義を検証すると共に、軍人詩人に代わって台頭したスペンサーやフィリップ・シドニーら人文主義詩人の作品を分析することにより、〈未婚の女王〉から〈非婚の女王〉へとエリザベス一世の処女性が再定義される過程を再構築した。当時レスター伯によって雇用されていたスペンサーが匿名で出版した牧歌詩集『羊飼いの暦』は、女王がレスター伯の邸ウォンステッドを訪れた際に上演されたシドニーの仮面劇『五月の貴婦人』に見られる牧歌風の女王崇拝のレトリックを援用しつつも、それを風刺詩という新しいジャンルへと発展させ、1570 年代末期の宮廷政治の緊迫した情勢を巧みに照射する。その際、寓意の多義性は、最大限の効果を発揮する。エリザベスは、一方でイングランドに牧歌的な平和をもたらす君主として称えられながらも、他方では忠臣の奉仕を無にする残酷な君主として慨嘆の対象となる。党派主義的な読みを前提とする寓意は、君主崇拝を装いつつも、それとは全く逆の女王風刺と宮廷風刺を滑り込ませる離れ業を可能とするのである。

第五章「ロマンシング・イングランド—エリザベス朝の騎士道ロマンスブーム」は、処女王崇拝の言説が一層の高まりを見せた 1580 年代から 1590 年代の時期に焦点を当て、この間に騎士道ロマンスが辿った変遷の過程を明らかにすると共に、その変容がエリザベスの表象を構築する上で及ぼした影響を精査した。エリザベス一世が君臨した 16 世紀後半は、ヨーロッパ大陸では既に凋落の一途を辿っていた騎士道文学が活気を取り戻す稀有な一時期を形成している。騎士道文学のリバイバルというこのイングランド特有の現象は、女性君主の誕生と密接に連動していた。

処女王崇拝に沸く宮廷文化をバックボーンとしてシドニーの『アーケイディア』やスペンサーの『妖精の女王』といった大作がエリート読者層に向けて出版される一方、大衆娯楽に徹した散文の騎士道ロマンスがロンドン市民の間で流行する。そこには、貴族的エリート主義と世俗的娯楽性という騎士道ロマンス文学そのものに内在する二極性が窺えると同時に、宮廷社会と市民社会が物理的にも精神的にも緊密な形で共存していたロンドン特有の文化的土壌を見出すことができる。

宮廷社会と市民社会によって共有される祝祭文化は、同時代の演劇の発展にも寄与する。第六章「芝居小屋の女王様」では、ジョン・リリーの『エンディミオン』やシェイクスピアの『真夏の夜の夢』を宮廷の祝祭文化の文脈で分析した。エリザベス朝イングランドの宮廷演劇は、経費削減のために宮廷余興のアウトソーシング化を目指す宮廷祝典局の方針もあって、商業劇場との連携によって成り立っていた。宮廷演劇がリハーサル上演という名目で私設劇場の観客を楽しませる一方、ロンドンの人気劇団による宮廷上演が常態化する。女王や宮廷貴族とロンドンの民衆が同じ芝居を観劇する特殊な状況は、複数の視点を内在化させることによって、意味レベルの重層化をもたらし、作品の文学的表現力を一気に底上げする。と同時に、エリザベス表象のさらなる拡散・肥大化が促進され、次章で論じる風刺文学の素地が形成されることとなる。

第七章「疲弊する王権と不満の詩学」では、エリザベス一世の政治的・文化的求心力に翳りが見えた 1590 年代から女王崩御に至るまでの期間を考察の対象とし、最晩年のエリザベス一世の表象を分析した。その際に注目したのが、法学院詩人のサー・ジョン・デイヴィスによる小叙事詩『オーケストラ』である。「ダンスに関する詩」という副題が示唆するように、もともとは法学院の余興のために執筆された可能性も指摘されるほど、『オーケストラ』には祝祭的な要素がふんだんに盛り込まれている。特に注目したのは、エリザベス一世を体現する王妃ペネロピーに対して鏡を掲げる仮面劇風の趣向である。『リチャード二世』『ハムレット』『シンシアの饗宴』『マクベス』等、君主に対して鏡を向ける所作、あるいはその比喩を取り入れた作品が 16 世紀末から 17 世紀初頭にかけて流行したが、1594 年初頭には執筆されていたと推測される『オーケストラ』は、この演劇的趣向の最初期の例として位置づけることができる。本章では、風刺文学が注目を集めた 1590 年代においてひときわ存在感を誇った法学院の文芸活動を踏まえつつ、君主が覗く鏡のモティーフに焦点を当てながら、デイヴィスのエリザベス表象の両義性を指摘し、同種の作品傾向がベン・ジョンソンの風刺喜劇『シンシアの饗宴』に継承されている点を指摘した。

終章「祭りの喧噪から文学は生まれる」では、本論文の全体的な構想を総括すると共に、エリザベス一世の表象を構築する上で祝祭と文学が連動する形で果たした役割の重要性を改めて強調し、これを本論文の結論とした。本論文が一貫して追ったのは、エリザベス一世の虚像が構築される複雑なメカニズムである。一見すると君主崇拝に根ざした王権のプロパガンダと思しき作品には、政治的陳情をしたたかに行う宮廷貴族の思惑や、宮廷の腐敗を冷ややかに見つめる市民的倫理観の発露が窺える。それはとりもなおさず、文学が積極的に政治に介入し、社会のあり方

を構築し、文化の方向性を規定する上での知的・精神的原動力として機能していたエリザベス朝の精神風土をも浮かび上がらせる。その際に認識されるのは、文学が宮廷社会と市民社会を繋ぐ上で格好の公共メディアとして機能したエリザベス朝祝祭文化の特異性である。文学的な祝祭を通して宮廷文化と市民文化の混淆が生じたエリザベス朝には、実に柔軟で融通無碍な文化受容の在り方が見て取れる。エリザベス朝文学がイギリスのルネサンス期と呼ばれる黄金時代を築くことになった所以は、まさにこの点にある。

「処女王」なる天下無双のキャラクター性を有する君主を戴くイングランドで、祝祭と文学は相互に影響を及ぼし合い、宮廷社会と市民社会の双方を取り込みながら発展する。そして、印刷出版と商業劇場という二つの新手メディアの受け皿を得ることで、祝祭空間は文学的虚構の中に包摂され、エリザベス表象は神話化と脱神話化を繰り返しながら、時代を超えて無限に生産され続ける。王が祭りを生み、祭りが文学を生み、文学が王を生む——エリザベス表象の多義性は、このダイナミックな円環構造の産物だったのだ。